國學院大學学術情報リポジトリ

エッセイ 日本文化研究所36年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001914

日本文化研究所36年

井上　順孝

はじめに

ネットワークという言葉は普通に使われているが、ネットワークにもいろいろある。コンピュータ、脳神経、人間関係などいろんな領域に広く使われるようになった。当然研究のネットワークという用法もあり、そのような表現も多く見られる。他方共同研究という言葉は以前からあるが、共同研究と研究のネットワークとは何が違うのであろうか。

インターネット時代がもたらしたウェブ上のネットワークと脳神経研究で明らかになりつつあるニューロンのネットワークには非常に多くの類似点がある。インターネットのネットワークは脳内のネットワークの仕組みに近づきつつあるのではないかという印象を持つ。

その１つの特徴は、どこに中心があるか分からず、どこがどう関係しているかは部分的にしか知りえず、１つの動きが他にどういう影響をもたらすかは予測がしがたい。それでいて瞬間瞬間だけを見ると、なにがしかの意志をもって動いているように見える局面がしばしばあらわれる。研究のネットワークもこうした性質を帯びてくるのではないかと、最近では考えるようになっている。

１．国際的な人間関係

私が1982年４月に日本文化研究所に着任したときは、ちょうど國學院大學創立百周年の節目の年にあたっていた。最初の大仕事は國學院大學の創立百周年記念事業の一環として行われた国際シンポジウム「アジアの近代化と民族文化」に関わるものであった[1]。83年１月に開催された。宗教社会学では世界的に著名であったロバート・ベラー氏とピーター・バーガー氏を招いての公開講演会、さらに韓国、フィリピン、インドネシア、インドといったアジア各国の研究者を交えての国際シンポジウム、そして会議の後は伊勢神宮、当時は富士山麓に建っていた大石寺へのツアーの計画などを担当した。

今思えば國學院大學としては画期的な企画であったが、これは当時の主事であった薗田稔氏がその師にあたる柳川啓一氏など多くの知己の協力を得て企画されたものであった。ロバート・ベラー氏とは前年の1981年にカリフォルニア調査での日系人の宗教についての共同調査をしていたときに、研究代表者であった柳川啓一氏の運転手役を兼ねて自宅を訪問してお会いしていた。その折はベラー夫人を交えて話を伺えたが、シンポジウムにも夫妻で来日された。シンポジウム後のツアーのときに、個人的な話題にも触れる機会があったことは思い出深い。ベラー氏は残念ながら2013年７月に逝去された。

ピーター・バーガー氏は宗教社会学では非常に高名であったが、実際に会ってみると、行動にけっこうお茶目な面があることを感じた。バーガー氏もこの2017年６月に逝去された。アジア諸国の研究者として韓国の柳東植氏、フィリピンのルネ・メンドーザ氏、シンガポールのエディ・クオ氏らとも知り合い、ツアーのときに親交を深められたのは楽しい思い出で

ある。柳氏やクオ氏とは、後年またお会いする機会があった。今ほど国際交流が簡単ではなかった時代に、こうした機会が持てたことは、個人的に非常に貴重な体験であった。国際派であった宗教学者の岸本英夫が設立に関わったことも大きく関係していると思われるが、日本文化研究所には国際的な共同研究には潜在的な可能性が保持されているように感じる。リチャード・ドーキンスのミーム論を借用するなら、いわば「国際的視野に立った日本文化研究」ミームが、日本文化研究所には生き続けているということかもしれない。ちなみに日本文化研究所の所長を務められた上田賢治氏や平井直房氏は、岸本英夫からの影響を大なり小なり受けた方々である。

1996年１月の国際シンポジウム「グローバル化と民族文化」は、ちょうど私自身が主事という立場にあったので、所長の阿部美哉氏と相談し、どちらかというと宗教社会学の関係者を多く招いた[2]。ヨーロッパの宗教社会学ではよく知られたリリアン・ボアイエ氏や比較文化論で知られる韓国の金容雲氏などに参加してもらったが、阿部氏の人脈の広さがモノを言った。とくに国際宗教社会学会（SISR）には多くの知人を有していて、ヨーロッパの研究者と太いパイプがあった。なお、このときの会議が１つの縁となり、1999年７月にベルギーのルーベンで開催された第25回国際宗教社会学会の大会で、私はプレナリーセッションで講演することとなった[3]。

1982年国際シンポジウム「アジアの近代化と民族文化」（於国際文化会館）　中央はバーガー氏

また1970年代半ばにNHKのニュースキャスターを務めた磯村尚徳氏が、当時日本文化研究所の教授であったので、磯村氏に依頼してフランスから関係者を招聘した。ローランド・ロバートソン氏は、それ以前に私が同氏の著書を共同で翻訳していたこともあり[4]、快く引き受けてもらった。西垣通氏は深みのあるインターネット論を展開する非常に著名な研究者

であるが、私が学生時代に所属していた東京大学少林寺拳法部の後輩にあたるので、彼としても断るわけにはいかなかったと思う。もっともテーマは日頃彼が抱いていたものに近かったはずである。このように、日本文化研究所のスタッフが有する国内外の人脈が活かされた国際シンポジウムであった。この様子が1996年２月10日にＮＨＫ衛星放送第一で１時間番組として放映されたのは磯村氏の尽力による。２つの国際シンポジウムに関わったことで、人脈がどう活かされるのかを目の当たりにすることとなった。

このときのテーマはグローバル化の民族文化への影響であったが、多くの出席者は国際化の問題としてとらえていた。国際化の１つの形態としてのグローバル化という視点といっていいだろうか。ボーダレス化という側面への着眼は、まだ少数派だった。出席者の中では随一の国際派と言える磯村氏の論を聞いていてもそう思った。EUが会議においてそれぞれ公用語を相互に通訳する例をあげていたが、これはまさに国際化の話である。

1996年国際シンポジウム「グローバル化と民族文化」（於国際文化会館）　司会は阿部美哉氏

国際化とグローバル化は重なるが、やはり異なるものである。国際化の延長線上にグローバル化を置くという視点は線形的な捉え方である。この捉え方で説明できる現象もあるが、国際化とグローバル化を非線形的にとらえるべき局面やグローバル化を創発的現象として捉えるべき側面がある。線形的な変化でない側面は、主として高度情報化社会というかつてない状況がもたらしたと私は考えている。このグローバル化時代にはどのような研究ネットワークの形態が生じてくるのか。それは後述する2002年から５年間続いた「21世紀COEプログラム」を実施していく頃に、その姿がしだいに明確に感じられるようになった。

２．学外者との共同プロジェクト

百周年記念関連の国際シンポジウムは着任早々の貴重な体験であったが、当時日本文化研究所には部門が設けられていた。それぞれに責任者がいて、研究員等がその下で日々研究活動に従事していた。分野的には国学、国語学、文学、民俗学といった領域が中心であった。私は第三部門で上田賢治氏が担当する「海外の日本学と比較国学の研究」というテーマを割り当てられた。東京大学の助手時代の研究である1977年から1981年まで３回にわたって行ったハワイ、カリフォルニアの日系人の宗教調査の結果をまとめる必要もあった[5]。だがせっかく國學院大學に勤めることになったのだから神道に関わる研究を深めたいと考え、教派神道の調査も始めることにした。

着任してほどなく阪本是丸氏、武田秀章氏、ジョン・ブリーン氏などと明治期の宗教行政や政教問題についての研究会を重ねた。かなり濃密な議論を重ねた記憶がある。国学研究の牙城とも言うべき研究機関に身を置いて、地道な研究に徹している人たちの研究ぶりは、自分にはすこぶる刺激的であった。関心を共有できる研究者によって深く掘り下げていくことを目指す共同研究を味わうことができた。この研究会の成果が『日本型政教関係の誕生』である[6]。この研究会に触発され、明治期の宗教行政を知る上で基本的な資料の一つである『社寺取調類纂』の神道関係の部分を翻刻することにした[7]。一つひとつの文字の解読に取り組むのは自分にとっては新鮮な体験であった。教派神道の創始者たちの思想も扱うことになり、神理教教祖の佐野経彦の手紙などの解読を手がけた。古文書学などやったことのない身には、こうしたことは時間がかかる作業であったが、何度も文字を見ていると、だんだん読めるようになるものだと思った。だが同時に一生こういう研究をするのは、自分の性には合わないということも実感した。

部門があり、計画に基づいて担当者が実施するという組織形態はごくオーソドックスなものであり、着実な成果をあげていたと言えよう。学部では教育が中心になるので、教員相互の研究情報交換はなおざりにされやすい。研究所のような組織形態での研究は、目的と分業、相互関係が明確にできるから、研究情報の交換はよほどやりやすくなる。もっとも部門の長にいる人が自分の考えのみを押し付けるなら、そのもとで研究する者は直ちに下請け機能へと化す。当時の日本文化研究所にはそうした面もなくはなかったが、基本的に若い研究者の芽を摘むような仕組みではなかった。

とはいえこの部門制度はどうしても縦割り組織になりやすく、せっかくさまざまな領域の研究者が集まっているのに、なかなかその利点を活かしにくくなる。もっとも大きな課題は、学外の研究者とのつながりを太くしていくためのルートをどう広げるかであった。

１つの大学あるいは１人の指導教員の中で形成された共同研究を超えた研究の一般的形態としては、科研費によるものがある。大型の科研費となると広く学外の人たちとの共同研究が前提になっている。東京大学で助手をやっていた頃の、九学会連合による奄美大島の調査、東京大学と旧東京教育大学のグループによるハワイ・カリフォルニア調査は科研費によるものである。

こうしたやや公的な共同研究とは別に宗教社会学研究会（以下「宗社研」）で得られた共同研究・共同調査で得られたつながりは、日本文化研究所でのプロジェクト推進にとって、非常に貴重な資源になった。日本文化研究所に来たとき、宗社研の活動はピーク時にあたっていた。宗社研は1975年に結成され、1990年に解散したが、主として上智大学で開催されて

いた月例の研究会は、信頼できる研究者仲間というものが生まれる上でとても重要な役割を果たした。この人が言っていることは確かである。この人はきちんと調べた上で話したり書いたりする人である。この人は思い付きでしゃべる人である。そういうことの見極めの訓練ができた。少なくとも研究協力をやることで互いに向上できそうな人というのは、なんとか見分けができるようになったのではと思っている。

宗社研の集まりは若手中心の研究会ということもあったが、学閥のようなものによって無意識のうちに作られていた方法論や対象への視点の偏りを自覚させる効果があった。宗社研の解散にあたって刊行された『いま宗教をどうとらえるか』[8]の末尾に研究会の記録がある。それをみると実に多様な研究分野の人々が一堂に会して議論を重ねたことが分かる。

大学や学派を超えた議論の面白さを実感するようになっていたので、それを日本文化研究所のプロジェクトにも積極的に活かす工夫を考えた。宗教教育プロジェクトは、ちょうど宗社研が解散した1990年にスタートした。上智大学の安斎伸氏のもとで研究していた岩井洋氏や田島忠篤氏に加わってもらい、また宗教学とともに教育学にも足を突っ込んでいた佐々木裕子氏や彼女の知り合いの市川誠氏などにも加わってもらい、複数の大学の研究者の共同研究として始められた。

国内の宗教系学校、韓国の宗教学校など、50ほどの学校を訪れ実際の授業を見たり、教員や生徒と面談したり、学校行事を参与観察したりした。宗教教育についての議論や教科書や参考書の内容をもとにした研究はそれまでにもあったが、これだけ実際に多くの学校を訪問しての研究はこれが初めてであると思う。行政や理念次元での話だけではなく、教室における教員と生徒のやり取りをもとにした研究は、緊密な連携のとれた共同調査であればこそと振り返っている[9]。

2003年韓国での宗教教育調査（釜山）後列右端はイ・ウォンボン氏

このプロジェクトでは数回韓国を訪れ、韓国の宗教研究者と意見交換したり、宗教系学校の授業や行事等を合同で参与観察したりした。2001年には東西大学でまとめのシンポジウムを開催した。このことは、その後の日韓の宗教研究者の交流が盛んになる上で一役買ったと考えている。韓国での宗教系学校の調査に際しては、東西大学校のイ・ウォンボン氏や圓光大学校のヤン・ウンヨン氏などに非常にお世話になった。ソウル大学校の学生であったパク・キュテ氏をはじめ何人かの若手研究者に通訳をお願いしたが、このときの縁で、パク氏は後に私が編集した『ワードマップ神道』（新曜社）を韓国語に翻訳して出版した[10]。韓国での研究会ではソウル大学校のキム・ジョンソ氏や西江大学校のキム・ジェヨン氏などとも知り合えた。学生に対するアンケート調査は1999年、2000年、2005年、2007年の４回、韓国でも実施したが、これもこうした人たちとのつながりがあったから可能になった。またイム・テホン氏には、EOSの韓国語版をオンラインで公開する際に、校閲をお願いした[11]。

宗教教育プロジェクトに関わっていた研究員のうち、磯岡哲也氏、岩井洋氏、川瀬貴也氏などは、その後独自に韓国の研究者とのつながりを深めた。日韓の研究交流はその後新たな段階にはいったが、いわば交流の草創期に、宗教教育プロジェクトが果たした役割は少なくないと振り返っている。

さて、1990年に解散した宗社研であるが、その解散の理由はともかくとして、個人的にはもう研究会ではなく、学会にした方がいいのではないかという意見を解散前からもっていた。1991年に私の博士論文となった『教派神道の形成』（弘文堂）が刊行され、その合評会が東京大学の赤門横にあった学士会館分館で開かれた。合評会後に本郷三丁目近くの店で開かれた懇親会の席上で、私は「学会をつくるぞ」と叫んだことを覚えている。それは酔った勢いでの言葉ではなく、腹案としてあったものである。実際に1993年には有志により「宗教と社会」学会が設立された。この学会には日本文化研究所での経験を活かしてプロジェクト制度を導入したいと考えていた。

提案が受け入れられプロジェクト制度が発足すると、自分が責任者となって「学生の宗教意識調査プロジェクト」を立ち上げた。これには伏線がある。日本文化研究所の宗教教育プロジェクトでは、実態調査や各種の資料・データの収集とともに、1992年度に学生の宗教教育に関する意識調査を実施した。全国32大学、4,000名余の学生を対象にしたこのアンケート調査は、非常に興味深い結果となった。朝日新聞などいくつかの新聞でかなり大きく紹介された。これをさらに充実させ、類似の調査を実施したいという思いがあったので、「宗教と社会」学会のプロジェクトにしたのである。意識調査には関心を持つ人が多く、第１回の調査には20人以上のメンバーが参加してくれた。

１年ほどの準備ののち、1995年から開始された意識調査は、結局2015年までの20年間に12回にわたって実施されることになったのであるが、その間に得た有効回答者数は合計約66,000にのぼる。この調査は多くの研究者の共同研究に基づいている。途中メンバーの入れ替わりはあったが、日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会プロジェクトとの長期にわたる協力関係が基盤になっていた。各回の調査ごとに報告書が刊行されたが、2016年には12回分をまとめた総合報告書が刊行された[12]。巻末には12回の研究協力者の名前がリストアップされているが、その数は80人を超える。

無記名で行われたアンケート調査であるが、自由記述を含めて回答のデータをすべてコンピュータに入力した。これにはけっこうな手間がかかった。毎年複数の学生・院生に入力作

業を依頼し、それをチェックして統計処理をするということを重ねてきたが、その間コンピュータソフトが少しずつ使いやすくなった。ただデータ入力はずっとDBproという一般の人にはほとんどなじみのないデータベースソフトを使った。エクセルよりも日本語入力が簡単なのと、アルバイトの学生にも比較的短期間で操作を覚えてもらえたので、最後までこのソフトを使うことになった。

統計処理には途中からSPSSを用いた。これで非常に処理が楽になった。DBproでの分析にはけっこう時間がかかっていたので、初めてSPSSを用いたときは技術の革新に感謝した。図やグラフもWORDの機能向上に即して、少しずつ見やすいものに改善した。

こういうアンケート調査は質問項目の内容が決定的に重要である。個人で考えたものはどうしても偏りや不備が出てくる。この調査では聞きたい事柄をメンバーに出してもらい、それをもとに何度も議論を重ね、最終的に20項目に絞った。もっともサブの質問を入れると実質数十の質問項目である。これほど細かく質問した宗教関連のアンケート調査はほとんどない。調査もメンバーが勤務する大学等で実施したので、回答者数も毎回数千に上ったのである。衆知を集めるというやり方の意義を身をもって体験した。12回すべてに加わってもらったメンバーもいる。非常に感謝している。

当初はランダム調査ではないから意味がないとか、大学ごとの偏りが大きいとか、一部の社会学者から批判も受けた。しかし回を重ねるごとに、多くの大学で講義を受けている学生にほぼ同時期に行う調査でも、かなりの精度の結果が得られることがしだいに明らかになった。実家に神棚があるかないか、仏壇があるかないかなど、短期間で大きく変わるはずのない数値は比較的安定した変化を示した。それに新聞社などで行われるランダム調査でも、たいていは層化二段無作為抽出などの方法をとるので、誤差はけっこうある。たとえば同時期に複数の新聞社が内閣の支持率を調べた数値を比較してみれば10%ほど違う場合もある。

また宗教に関する質問は、質問項目の内容、あるいはワーディングによっても回答の数値はけっこう変わる。基本的項目については同じ質問内容で20年間続けたわけなので、おそらく時間がたつほど貴重になる調査結果と考えている。

3．コンピュータ・テクノロジーのご利益

宗教教育のプロジェクトと相前後して始まったのが『神道事典』[13]の刊行プロジェクトであった。1989年に始まったこのプロジェクトは、私にとって日本文化研究所で最も多くの人と協力して携わった仕事であった。今考えると、けっこう大それた企画を立案したことになる。それまで平田篤胤の研究や教派神道の研究をやっていたとはいえ、神道の領域ははるかに広い。それでも思い切ってスタートしたのは、日本文化研究所の潜在的力をもっと社会に示したいということがあったが、『新宗教事典』[14]の編集作業を通して、綿密な共同研究による事典編纂ということの意義とやり方について、多少なりとも経験が蓄積されていたことも大きい。

『新宗教事典』は５年ほどの歳月をかけ1990年に刊行されたが、これは宗社研でできた研究者のつながりと日本文化研究所の研究システムを活かすことによって可能になったことであった。事典の編纂は根気の要る作業である。編集者同士の信頼も大事である。またどのような執筆者を選ぶかも重要である。これぞと思う執筆者に依頼して快く引き受けてもらう上では、それ以前に構築されている人間関係がけっこうものをいう。編集作業がスタートした

とき編集者（孝本貢氏、対馬路人氏、中牧弘允氏、西山茂氏と私）の５人がまだ30代後半から40代前半であったという年齢も幸いしたかもしれない。互いに丁々発止で意見交換するエネルギーが十分あったからである[15]。

新宗教研究と神道研究はいくつかの面で重なりをもっていた。教派神道、神道系新宗教、民俗信仰の分野などである。『新宗教事典』編集が最終段階を迎える頃には、すでに『神道事典』の構想は固まっていた。日本文化研究所のプロジェクトに関わる中で、皇學館大学の研究者との交流も深めることができた。櫻井治男氏や白山芳太郎氏とは宗社研時代から知っていたが、本澤雅史氏などさらに多くの皇學館大学の比較的若手の教員と知り合えたことは、２つしかない神道系大学の教員が協力して事典を編集することを、よりスムースにした。

他方、コンピュータ・テクノロジーの導入において、日本文化研究所は大学内で傑出していた。日本文化研究所に来た1982年は、ワープロ専用機を人文系の研究者の一部が利用し始めるような時期であった。しかし新しいテクノロジーには無理解も生じる。ワープロ専用機を購入して欲しいという要望に対し、高いから駄目だという理由は納得できた。当時ワープロ専用機は今から考えられないくらい高価で、狙っていたNECの文豪という機種は130万円ほどであった。けれどもタイピストがいるからそのような機器は不要であるという反対論には強く異議を唱えた。そのうちタイピストは要らなくなる。タイピストにワープロを学ばせるべきであると主張した。主事の薗田稔氏に再三申し入れをしたこともあって、20万円ほど値引き交渉して文豪の購入がかなった。たぶん大学内では第１号だったと思う。これで先に述べた国際シンポジウム関連の準備は相当楽になった。８インチフロッピーにシンポジウムで用意し、またその結果を公表するためのすべての原稿が保存できた。高価なものであったから十分に活かすのは当然であった。今では当然のこうしたことでも、当時としてはまさに画期的なことであった。

ワープロ専用機が文章作成の便利な機械として認識され始めた頃は、「マイコン時代」という言葉が広まっていた頃でもある。コンピュータを利用した研究の可能性に人文系でも少しずつ関心が集まっていた。翌1983年には日本文化研究所でコンピュータを導入し、データベース作成に利用することとなった。『続神道論文総目録』が刊行されたのは1989年である。これは1963年に日本文化研究所で編集刊行した『神道論文総目録』の続編であった[16]。同書の編集に際して、プロジェクトメンバーがカード形式で集めてきた論文のデータは、すべてコンピュータに入力した。当時はMS-DOSというOSが主流で、今と比べると入力はけっこう煩雑であったが、それでも手書きのカードという従来の方式に比べれば、格段の便利さを有していた。入力したデータをもとに分類篇と人名篇の２種類を作るのも容易であった。またキイワード索引の作成もはるかに楽になった。

こうしたコンピュータの利用は、同時並行していた1980年代後半の『新宗教事典』のデータ篇作成でも同様になされた。参考文献、年表など資料篇に含まれる多くを、コンピュータにデータ入力した。

このように、共同研究ができる研究者仲間が一定数いたことと、コンピュータ・テクノロジーの導入が順調に進んでいたことが『神道事典』刊行の大きな推進力になったのである。

『神道事典』は当初から英語版も作りたいと密かに考えていた。それで1994年に刊行された後にノルマン・ヘイヴンズ氏に英訳を依頼した。関係者で相談しなければならない訳語は予想以上に多く、なかなか大変な作業であった。『神道事典』は９部からなっていたが、そ

のうち「神」「神社」、「流派・教団と人物」の３つの部の英訳ができ、これらはそれぞれを一冊の書籍として刊行することができた[17]。その途中で思いがけない事態が到来した。文部科学省が21世紀COEプログラムという大学での研究推進のための予算を組み、國學院大學の「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」というプログラムが2002年に採択されたのである。こうした外部資金導入の計画の際には、たいてい阪本是丸氏の獅子奮迅の活躍がある。緻密に計画を練って國學院大學の特色を活かしたプログラムを計画してくれる。

研究は３つのグループによって推進され、私は第３グループ「神道・日本文化の情報発信と現状の研究グループ」のリーダーとなった。そこでこの機に『神道事典』の残りの部分を英訳した上で、本文をすべてウェブ上に公開する案を出した。EOS（Encyclopedia of Shinto）というオンライン事典の構想である。翻訳はオリジナリティがないのではというような意見を述べた宗教民俗学の教授が一人いたが、大半のメンバーには神道研究の国際的な展開を考えるなら、非常に大きな意義があると認めてもらった。そこで第３グループの事業の柱の１つに据えることとした。その後の神道研究の国際的展開を考えるなら、やはり画期的な企画であったと自負できる。これによって神道研究の国際的な輪は大きく広がったし、神道に関心をもつ若い研究者が思いがけない国にも出現した。神道に関心を抱き國學院大學に留学やその他の理由でやってきた外国人学生は、例外なくEOSで神道の基礎的知識を得ていたことが分かった。

翻訳には多くの外国人研究者が加わったが、コンピュータ・テクノロジーは1990年代後半以降一段と進化していたので、それを駆使した。研究員の武井順介氏と江島尚俊氏にEOSの公開のためのプログラムを作成してもらった。いろんな意見を入れてバージョンアップしていったので、けっこう使い勝手のいいプログラムになった。現在は富士通が提供している新しいソフト（Musetheque）でEOSの新バージョンを公開しているが、このときの旧バージョンにもまだアクセスがある[18]。翻訳にあたっての外国人研究者とのやりとりのために作成した意見交換のためのプログラムは、実際に担当した遠藤潤氏や平藤喜久子氏が重宝したようである。

2006年COEプログラムによる会議「神道研究の国際的ネットワーク形成」

COEの第３グループではこの翻訳作業に加え、神道を巡る一連の国際シンポジウムの開催をもう１つの柱に据えることとした。現代の神道研究をめぐる計６回の国際シンポジウムを実施した。これについては前回のこの年報で概略を紹介したが[19]、それまで関わりの薄かったフランスやドイツあるいはイタリアなどの研究者との研究が広がった。外国人による神道研究のレベルの高さを知ることもできた。ジョン・ベントリー氏は日本書紀の解釈にあたって、中国語ができる日本人の書いたと考えられる部分と、日本に帰化した中国人の書いたと考えられる部分の違いに触れるなど、非常に緻密な研究成果を示した。ファビオ・ランベッリ氏は中世神道について文献を読みこなした上での実証的な議論を展開した。会議に参加した若い神道研究者には非常な刺激になったのではなかろうか。

EOSの翻訳作業と一連の国際シンポジウムによって構築された国際的な共同研究の輪は日本文化研究所にとって実に貴重な財産となった。とりわけ現在日本文化研究所の客員教授であるケイト・ナカイ氏は、『モニュメンタ・ニポニカ』の主幹を務めた経験があり、以後もいろいろなアドバイスをいただいている。

COEプログラムの実施あたりから、研究のネットワークはかなりダイナミックなものになってきた。共同研究というより研究のネットワークと呼ぶ方がしっくりくる形態になった。一つ一つ、あるいは一回一回の会議は共同研究と呼べるものだが、そこでのつながりは時間的にも地域的にも多様性があり、つながりの一つ一つの質的差は顕著であった。まさに一回限りのつながりも多かったが、比較的長期にゆるやかな関係を維持したり、一つのつながりが新たなつながりを生むことも多くなった。

４．グローバル時代における研究のネットワーク

COEプログラムが終了した後、日本文化研究所は改編されることとなり、2007年から研究開発推進機構・日本文化研究所となった。研究の国際的ネットワークをより恒常的なものにしていくための具体的システム作りが模索されるようになった。毎年秋に国際研究フォーラムを開催するのが常になった。これも日本文化研究所年報の前号に概略を述べておいたが、宗教文化に関する非常に多様なテーマを扱うことになった。2011年以降は次に触れる宗教文化教育の推進とも連動させて、映画、美術、文学などジャンル別にアプローチしたり、イスラーム、キリスト教、インド宗教、東アジア宗教など、宗教別の視点も盛り込んでいる。これによってネットワークは複雑になったようにも感じられるかもしれないが、それぞれのテーマの関係の深さが実感されることになった。

COEプログラム時代に構築された関係も一段と深まった。フランスのINALCOのジャン＝ミシェル・ビュテル氏のように、日本文化研究所の企画に恒常的に関わってもらう研究者も出てきた。2010年代半ばになり、日仏会館と日本文化研究所との連携に一役買ってもらった。2014年３月に日仏会館でパリ国立高等研究実習院のジャン・ボベロ氏との公開討論会を行った。テーマは「宗教・ライシテ・道徳　日仏の道徳・宗教教育と新たな政策」であった。ボベロ氏はフランスで宗教教育の専門家として著名であるが、この討論会の話をもってきたのもビュテル氏である。

ハーバード大学ライシャワー日本研究所とはかつて日本文化研究所に客員研究員として在籍していたヘレン・ハーデカ教授を介して、実質的な研究交流が続いている。派遣協定に基づいて、星野靖二氏、大東敬明氏など研究開発推進機構の専任教員が１年あるいは２年ハー

2013年ハーバード大学ライシャワー日本研究所でのシンポジウム

バード大学で学んでいる。2013年９月にはちょうど大東氏が同大学にいるときに私はライシャワー日本研究所設立40周年の記念シンポジウムに招聘されて発題した[20]。

他方、かつて日本文化研究所の研究員を務めた外国人研究者が、新たな勤務校でネットワーク形成に関わってくれる例も増えてきた。国際的なネットワーク形成に少しずつ足場が広がったと言える。

グローバル化は21世紀にはいり一段と進行し、研究ネットワークのあり方も真剣に考えるべき段階になった。そうした折りに日本文化研究所が関わったのは宗教文化教育推進センター（CERC）[21]を通しての、国内の研究者との共同研究の新しい形の模索である。宗教文化教育推進センターは、日本文化研究所の宗教教育プロジェクトが核になって形成されたものである。この経緯についてはすでに年報に述べておいたが[22]、ここでの研究のネットワーク形成は、以前に比べて少し特徴的なことがある。

2011年１月に開設されたCERCは、宗教文化士の認定試験を同年11月から開始した。その後毎年２回試験を実施している。この制度は日本宗教学会と「宗教と社会」学会という２つの全国学会が連携機関となっているが、運営委員は全国の国立私立の大学教員である。初代のセンター長をお願いした土屋博氏をはじめ、昨今の宗教研究の環境を広く見渡し、宗教文化教育が社会からも求められているものであると感じる研究者が中心になっている。國學院大學以外にも各地に宗教文化教育の拠点校と呼べる大学ができ、それぞれの地域で周囲の大学に呼びかけてもらっている。

日本文化研究所のプロジェクトは宗教文化教育教材の作成を通してCERCの活動と連携しているが、そこで生まれているネットワークは、いろいろな可能性を孕んでいる。たとえば、宗教文化教育を質的に高めることを念頭に置き、授業研究会のように宗教について教える教員相互の研鑽の場が形成された。宗教施設の見学を教員と学生と共同で行ったりしている。また2016年度にはじめて「宗教文化士の集い」というものを開いたときに、宗教文化士の資格を取得した人から、合同で宗教施設を見学し意見を交換したいというような要望が出てきた。教団見学を行ったことのある教員は少なくないと思うが、似たような関心を抱く人たちのネットワークをもとに実施すると、面白い効果が生じる。それを教育の方法や教員同士の情報交換、そして新たな着眼点の発見につなげることができる。ネットワークの形成がより柔軟にそして多目的になってきていると感じた。

2014国際研究フォーラム後の懇談（於学術メディアセンター）　中央は土屋博氏

宗教文化教育は宗教教育の１つの新しいタイプであるが、他の国に類似の発想はあるようである。インターネット上にはいくつかの大学が、内容的に宗教文化教育に非常に近い発想をもったコンテンツを公開している。2016年２月にはケンブリッジ大学名誉教授のリチャード・ボウリング氏やロンドン大学のアラン・カミングス氏など数名を訪問し、日本で行われている宗教文化教育について説明した。宗教文化士認定試験200問を英訳した冊子も持参した。2017年７月上旬にスイスのローザンヌで開催されたSISR（国際宗教社会学会）の国際会議では、日本で行われている宗教文化教育について紹介したが、私が発表したパネル以外にも宗教教育のパネルがいくつかあった。宗教についての教育の中立性などが議論されたパネルもあった。こうした動向を見ると、国外の研究機関との連携はいずれ生じるのではと感じている。

情報時代における研究のネットワークはいくつかの創発的な動きをもたらすのではないかという予測をもっている。これはニューロンのネットワークに見られる特徴の１つである。最初から予定されていた範囲でのつながりを超え、また予定していた目的以外にも展開していく、そういう特徴である。従来の共同研究もそういう可能性をもつが、協力して行う研究が、より柔軟で、より流動的で、より創造性の高いものになれば、研究ネットワークという呼び名はとてもふさわしい。

むすび

研究を続ければ続けるほど、自分が個人で行っている研究はこれまでの無数の研究の上にちょこんと乗っかっているだけということを強く感じるようになった。しかもどこに乗っかっているのか、何に乗っかっているのかさえ定かではないこともある。たまたまある分野で少しだけまとまった発表をしたり、知見を得たからといって、膨大な研究の総体からすれば、それはゴミにすら数えられないものであろう。それでも、自分の研究がそのどこかにつながっているという意識が持てるなら、そのつながりが何をもたらすのかについての夢想が楽しさを増す。

過去の研究の総体のうち、一人の人間が一生のうち知りうるもの、向かい合えるものはほんのわずかである。読めない言葉で書かれたものは世界中に山ほどある。手に入れることのできない場所にある資料もある。研究者が置かれたそうした否応なき環境の中で、新しい発想を得るための足場としての研究ネットワークは、とても重要な意味を持っている。一人で勝手にやっていると、迷路にはいりこみかねない。そうした危険予防だけでなく、創発性は、いろいろな意見を出し合っているうちに生まれやすい。自分でも意識していなかった脳の領域でのさまざまな活動が、他者との意見の交換の中で触発されてくるからである。

何気ない会話であっても、そうした潜在的な可能性を携えているのだということをよく知っている人とそうでない人がいる。いくら機関としてネットワーク形成のための仕組みを整えても、そうした脳の働きに気付いていない研究者には、その仕組みがあまり意味をもってこない。

こうして振り返ると、日本文化研究所では刺激的な出会いが多かった。他の研究者とのつながりで得られるヒントを、自分の脳内で何が兆しているのかについての気づきに連動させることの得意な人が多かったのであろう。そのようなつながりを見出しやすい研究機関に36年間も身を置けたことをつくづく幸せだと思う。

註

1　会議の内容は、國學院大學日本文化研究所編『アジア文化の再発見―比較国学をめざして』（弘文堂、1984年）として刊行された。

2　会議の内容は國學院大學日本文化研究所編『グローバル化と民族文化』（新書館、1997年）として刊行された。英文の報告書も刊行された。*Globalization and Indigenous Culture*、Kokugakuin University, 1997.

3　このときの講演をもとにした論文が“From Religious Conformity to Innovation: New Ideas of Religious Journey and Holy Places,” *Social Compass* 47-1,2000である。

4　R.ロバートソン著、田丸徳善監訳『宗教の社会学―文化と組織としての宗教理解』（川島書店、1983年）は、対馬路人、吉原和男、渡辺雅子の各氏との共訳である。

5　調査のまとめ自体は『海を渡った日本宗教』（弘文堂、1985年）として刊行した。

6　井上順孝・阪本是丸共編『日本型政教関係の誕生』（第一書房、1987年）。

7　この仕事は國學院大學日本文化研究所編『社寺取調類纂 神道・教化篇』（國學院大學日本文化研究所、1990年）にまとめた。

8　宗教社会学会編『いま宗教をどうとらえるか』（海鳴社、1992年）の巻末資料参照。

9　この学校調査の結果をまとめたのが國學院大學日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、

1993年）である。國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』（弘文堂、1997年）も宗教教育プロジェクトの成果である。

10 이노우에 노부타카, 신도, 일본 태생의 종교시스템, 제이앤씨（J&C）, 2010.

11 韓国語への翻訳を中心的に行なったのは、研究員のイ・ファジン（李和珍）氏である。

12 國學院大學日本文化研究所編・井上順孝編集責任『学生宗教意識調査総合報告書（1995年度～2015年度）』（國學院大學、2016年）。

13 國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂、1994年）。1999年には縮刷版が刊行された。

14 井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』（弘文堂、1990年）。なお、1996年には同事典の本文の縮刷版、そして資料篇を改訂増補した『新宗教教団・人物事典』が刊行された。

15 それでもいくつかの行き違いや対立はあった。そうしたときに最年長者の孝本貢氏は陰の調整役として心をくだかれた。残念なことに2009年に鬼籍に入られたが、感謝の念は尽きない。

16 國學院大學日本文化研究所編『続神道論文総目録』（第一書房、1989年）。同書は日本文化研究所創立30周年の記念事業の一環として計画されたものである。1962年から1986年までの四半世紀の間に刊行された13,000件余の論文が収録されている。

17 ノルマン・ヘイヴンズ氏の翻訳により次の３冊が書籍として刊行されたIJCC, *An Encyclopedia of Shinto (Shinto Jiten): Jinja,* 2004, *An Encyclopedia of Shinto (Shinto Jiten): Kami,* 2001, *An Encyclopedia of Shinto (Shinto Jiten): Groups, organizations, and personalities,* 2006。

18 旧バージョンには2017年７月時点で700万近いアクセスがある。

19 拙論「国際発信という役割」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』９号、2016年）参照。

20 そのときの私の講演のタイトルは“Japanese new religion and traditional religion in the age of information and globalization: Considering on various vhanges since the middle of the 1970s”であった。司会はヘレン・ハーデカ氏が務めた。

21 CERCはCenter for Education in Religious Cultureの頭文字。

22 拙論「国際的視点からみた宗教文化教育」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』８号、2015年）参照。